

シーン5

「ああっ♡ もう、始まっちゃってたのねえ♡」

「皆の広場で盛っちゃってるなんて…結局はみんな気持ちいいことに抗えないのよ…♡ それに、魔物と人間の乱交なんて、なかなか見れるものじゃないからねえ♡ ふふふっ♡」

「ん？ ……司祭君？ どうしたの？ ちょっとビックリしてるみたいだけど…」

「ああ…♡ なるほど、魔物に堕ちた人が居ることに驚いてるんだねえ…♡ ふふっ♡」

「キミと同じように、堕ちちゃった人は実は何人か居るんだよ♡」

「ふふっ♡ こっそり仲間を増やしてたんだあ♡」

「もう半分以上が魔物になっちゃってるから、なにも隠す必要はないしね…♡」

「みんなで神に感謝するミサを開いてるの♡ ほら見て、すぐく幸せそうでしょう？ ふふっ♡」

「司祭君も、あたしのふたなりチンポが目的で、部屋から出てきたんでしょ？」

「そろそろ迎えに行こうと思ってたんだけど…自分から来てくれて嬉しいな♡」

「オナホとしての自覚が出てきたみたいで、あたしも嬉しいよ…♡ ふふっ♡ ちゅっ♡」

「ほら、司祭君♡ あたしのふたなりチンポにキスしてよ♡」

「さっきまでジュボジュボしてたから、すぐく精液くさいかもしれないけど…♡」

「キミ、そういうのも好きでしょ？ ふふっ♡」

「あたしのおちんぽ、キミにチュッチュってされて、ペロペロしてもらうの、すぐく好きなんだ♡」

「いっぱいキミのこと、可愛がってあげるからさ…♡ ふふっ♡」

「……んっ♡ はあっ…… いいね♡ さすがだよ、司祭君♡ んうっ♡ ふふっ♡ ありがと♡ 司祭君の勃起したおちんちん♡ あたしのふたなりチンポとくっつけて、オナニーしよっか♡ んふっ♡」

「重ねてからヌチヨヌチヨにしながらのオナニー……♡ 絶対気持ちいいって♡ ね？」

「……んっ♡ ああっ♡ いいねえっ♡ 思ってたとおり…… んうっ♡」

「……すっごく、熱いねえ…… んっ♡ はあっ…… はあっ…… んあ……♡」

「先っちょの方クニユクニユしながら、んあうっ♡ シコシコ、するのお、んっ♡」

「こうやって、んっ♡ 両手を重ねながらあ、んあっ♡ お祈りするみたいにオナニー、するのおっ♡」

「はあっ、はあっ、んんっ♡ ゴリユゴリユって、当たってっ、気持ちいいよお♡ んんっ♡」

「んうっ♡ あっ♡ んぐっ♡ これっ♡ いいっ♡ いいよおっ♡ はあはあ、んんうっ♡」

「あっ、あうっ、くう、んんうっ♡ これえっ、すぐにイっちゃいそう、かもおっ…… んあっ♡」

「すっごく、気持ちいい…… んあっ♡ はあっ、はあっ、んうっ♡」

「キミのおちんちんがビクンビクンしてるのも、全部う、伝わってきてるよお♡」

「んあっ♡ シコシコするのっ♡ 気持ちいいっ、気持ちいいっ♡ 一人でするオナニーと全然違うの♡」

「はあっ、んっ♡ ああっ♡ ぎゅうって、しながらシゴくの、気持ちいいっ♡ はあはあ、んんっ♡」

「一人でしてるときは、強めにつ、んあっ♡ ガンガンシゴいてっ、シゴいてっ、やっとイけた感じだったのにつ…… ひうっ♡」

「司祭君のおちんちんも一緒に、んっ♡ 巻き込んでオナニーしてると、すっごく気持ちも高ぶっちゃってるよお♡」

「はあはあ、んんっ♡ あっ、ああっ、おちんぽ重ねてするオナニー、気持ちいいっ♡ ううっ♡」

「司祭君は、どうかなあ？ んあっ♡ はあはあ、んんっ♡ あたしの、ふたなりチンポ……♡」

「一緒にシゴかれるの、気持ちいい？ 気持ちいいよね？ ふふふっ♡」

「腰、浮いちゃってるもんね♡ あはっ♡」

「一人でしてたときと、やっぱり違うんだねえ♡ キミのおちんちんも、喜んでるみたいだし……んあっ♡」

「はあっ……はあっ……ううっ♡ んんうっ♡」

「キミのおちんちん、ずっとビクビクしっぱなしだね♡ はあ、はあ、んうっ♡」

「シゴかれるの、気持ちいいんだねっ♡ んうっ♡ はあ、んっ♡ ああっ♡」

「もう、イっちゃいそう？ ふふっ♡」

「なら、神に祈りながら……一緒にイこ？ ね？ んっ♡ はあはあっ、んんうっ♡」

「神様あ♡ ありがとうございます……んっ、くっ、ううっ……はあ、はあ、はあ、んんっ♡」

「あたしに素敵なおちんぽをくださったおかげで、んっ♡ みんなを幸せに導くことができそうです……くっ、んんうっ♡」

「はあ、はあ、はあ……んあっ♡ 祝福してください、ありがとうございますっ♡」

「射精する喜びをお♡ 与えてくださりっ♡ んぐっ♡ ありっ、がとお、ごさいますうっ♡ んんんううっ♡」

「あぁっ♡ もうっ、イクっ…… イっちゃうっ♡ んんっ♡ あっ♡ あっ♡ あぁっ♡」

「んんううあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁっ♡♡♡」

「あぁっ♡ んうっ♡ あっ、あぁっ…… はぁっ、はぁっ、あっ、んっ♡ あうっ…… はぁっ、はぁっ、はぁっ、くっ、んうっ……」

「はぁ、はぁ、はぁ、ふうっ…… ふふっ♡ 一緒に、イけたね……♡ ちゅっ♡ んっ…… はぁ……♡」

「司祭君……一回出しちゃったくらいで、終わる気なんて、もちろんないよね？」

「ふふっ♡ キミは、あたしのオナホなんだから、次は、どうすればいいか、わかってるよね？♡」

「……ふふっ♡ あはぁ♡ ははははははっ♡」

「そうだよっ♡ 司祭君っ♡ キミは本当に素直でいい子だよお♡」

「お尻をほじられたいんだね♡ すぐよく見えるよ♡」

「ふたなりチンポ……♡ すぐに入れて欲しいんだなーっ♡ ふふふっ♡ すっごく伝わってくるよ♡」

「あたしに、ちゃんと見えるように……四つん這いになって、アナルをクパクパさせるなんて♡」

「オナホ穴としては大正解っ♡ そんな、いい子なオナホ穴には、ちゃんご褒美をあげないとねっ……」

「……キミのアナルに、あたしのおちんぽを、一気に入れてあげるねえ♡」

「んんんんんうううっ！ あっ♡ んんっ♡ はあっ……はあっ……んあっ♡」

「やっぱりっ……♡ 司祭君のっ♡ アナルは最高だよっ♡ んうっ♡ 男の子なのっ♡」

「こんなメス穴持ってるなんてえっ♡ あっ♡ ああっ♡ 鳴いてる声えっ♡ すっごく可愛い♡」

「もっと、喘いでっ♡ んんっ♡ アナル締め付けながらっ♡ メス声で、鳴いて♡ んあっ♡」

「んんっ♡ いいっ♡ いいよおっ♡ もっと、もっとおっ♡ んんうっ♡ キミのエッチな声、聞かせてっ♡」

「はあはあ、んんうっ♡ アナル、ほじられながらっ、じゅぼじゅぼされながらあっ♡」

「あんあん♡ 鳴くの、気持ちいいねえっ♡ はあはあ、んっ♡ ああっ♡ すっごく、締まるよおっ♡」

「最初も気持ちよかったけどおっ……んんっ♡ 今は、もっと素敵な穴になったねえ♡」

「おちんちんイジられなくても、勝手にピュッピュって出ちゃうくらいっ♡ 気持ちいいんだよね？」

「ふふふっ♡ いっぱい感じてくれるのっ♡ 嬉しいなあっ♡ 犯しがいがあるよおっ♡」

「司祭君は♡ 犯されるのが♡ 好きだからねっ♡ んんっ♡ しょうがないよね♡ あんっ♡」

「はあはあ……気持ちいいねえ♡ あたしのふたなりチンポ♡ 根本まで簡単に啜えこんじゃうんだもんっ♡」

「司祭君の穴あ♡ ホントに最高だよ♡ んんっ♡ ああっ♡ はあ、はあ、はあっ、んあっ……んくっ♡」

「いっぱい感じちゃった？♡ 気持ちいいよね♡ よかったねえ♡ んうっ♡」

「入れただけで、そんなに可愛く鳴いてくれるならあ、もっとおちんぽでジュボジュボしてあげないとお……んんうっ♡」

「ああっ♡ アナルうっ♡ すごいよおっ♡ くっ、ううんっ♡ すっごく締まるうっ♡」

「動くたびっ、おちんぽが根本から、搾り上げられるのおっ♡ これっ、好きいっ♡」

「司祭君のアナル好きいっ♡ はあはあっ♡ 他の人よりも、何倍も気持ちいいのおっ♡ んんんうっ♡」

「はあはあ、はあはあ、んつくっ♡ ああっ……ううっ、んっ♡ んっ、んんうっ♡」

「……あたしだけのオナホ穴あ♡ いっぱい犯してあげるねえ♡ はあはあっ、んんっ♡」

「可愛い声っ♡ もっと、聞かせてっ♡ んんっ♡ 奥にいっぱいっ、突き上げてあげるからっ♡」

「あうっ♡ んんっ♡ みんなにも聞いてもらおうよ♡」

「司祭君が乱れまくって、メス声いっぱい出しながら感じてる姿♡」

「犯されて、気持ちよくなってるどころ、見てもらお♡」

「んんんっ♡ あっあっ♡ んうっ♡ ははっ♡ 司祭くんっ♡ すっすごいよおっ♡ アナルがすっごく締まってるっ♡」

「んっ♡ はあはあ……くうっ♡ 見られてると思ったら、もっと興奮してきちゃったのかな？ んあっ♡」

「さすがだねえ♡ あははっ♡ んっ♡ いいよっ♡ ホントにいい♡ んんうっ♡」

「オナホ穴あ♡ あたしのおちんぽを美味しそうに啜えて、搾り上げてくれるのお♡ 最高お♡」

「んぐうっ♡ ああっ♡ 司祭君っ♡ 今あ、幸せでしょ？ ふふっ♡ んうっ♡」

「気持ちよくなることだけしか考えないで♡ ただ腰を振り続けるオナホ穴あ♡」

「ずーっと気持ちいいことだけしていいようねえ♡ あうんっ♡ あたしもキミのこと、離す気ないからあ♡」

「アナルをこれからもずっと♡ 犯して、犯して、犯して… んふっ♡ 犯し尽くしてあげるねえ♡」

「んあっ♡ ああっ♡ ふふっ♡ あははっ♡ ははははっ♡」

「あたしと一緒にいい♡ いっぱいみんなに祝福してあげようねえ♡ はははっ♡」

「んうっ♡ あっ♡ あんっ♡ はあっ、はあっ、んんっ、んうっ… んぐっ♡ あっ、ああっ、あうっ♡」

「あうんっ♡ 締め付けっ、またっ、キツくなってきたあ… んんっ♡ はあはあっ、くっ、ううっ♡」

「んあっ♡ 司祭君のっ、おちんちん♡ もう限界、なのかなあ？ んんっ♡ はあはあっ、うあ…♡」

「じゃーあ！… たくさん中出ししてあげるからあ♡ みんなに、繋がってるところ、見られながらビュッビュッってしようねえ♡」

「いっぱい出していいよ♡ あうんっ♡ はあはあ、んんっ♡ 人間じゃできないくらいの精子出してみよう♡」

「みんなもそっちの方が喜ぶと思うんだあ♡ ちゅっ♡ なにより…」

「あたしが、嬉しいし♡ ふふっ♡」

「んっ、んうっ、あっ、あっ、あぁっ♡
ラストスパート♡
行くよおっ♡」

「ほらっ、お股開いてっ♡ みんなに恥ずかしい格好みられながらっ♡ イクのっ♡」

「んんうっ♡ 締まるよおっ♡
んぐうっ♡ このオナホ穴あっ♡
ホントすごいっ♡
くっ♡ んんうっ♡」

「あたしのおちんぽお♡
搾り取られちゃうっ♡
精液っ♡
そんなにつ、ほしいな
らあっ♡」

「お腹パンパンになるまで♡ 出してあげるよお♡ あっ、んっ、んんっ、んうっ、んぐうっ♡」

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっううっ♡ あたしっ♡ もうっ出るっ♡ でりゅのおっ♡」

「司祭君っ♡
気持ちいいっ♡
気持ちいいのっ♡
止まらないっ♡
ひぐっ♡」

「んんっ！ あっ！ ああっ！ イくっ、イクうっ！！ みんなに見られながらっ♡ イっちやうよおっ♡」

「あっあっあっ、んんっ！ んんぐうっ！♡
司祭君もっ、一緒に、イクんだよ？♡
んうっ♡ はあはあっ、うっ、ううっ！」

「んんっ！ イくっ、イっちやつ、ううんっ！ イっ、ぐうっ！♡♡」

「ん
ん
ん
ん
っ！
ん
ん
あ
あ
あ
あ
つ！」

「んんああああああああああああああああつっ！……♡♡♡」

「ああっ♡♡♡すごい♡♡♡すげえ♡♡♡あつ……んっ……はあっはあっはあつ、くっ♡♡♡ううっ♡♡♡」

「司祭君の精液い♡ 噴水みたいに噴き出してるうつ♡ あはあ♡ んん♡ はあっ、はあっ、はあ……ん♡」

「ふふふ♡ 人間だったら、一発で死んじゃう量なんじゃない？♡」

「はあはあ、はあ……ふう……♡」

「死んじゃうくらいの射精の快感……どうだったあ？♡ 気持ちよすぎて、何も考えられないかな？♡ ふふふ♡」

「司祭君が……♡ あたしと一緒に堕ちてくれるって……♡ 言ってくれたから、体験できた快感、だよ♡」

「ちゅ♡ ちゅ♡ちゅ♡」

「こんなの、経験したらあ♡ もう、他のこととか、どうでもいいよね♡」

「ふふ♡ ふふふ♡」

「それでいいの♡ 司祭君はあ、おちんちんで気持ちよくなることだけ、考えてればいいんだからあ♡」

「あたしのオナホ穴として……♡ ずっと一緒に居てあげるね♡」

「ああ……そうそう♡」

「今の司祭君には、もうどうでもいいことかもしれないけど……♡」

「キミが魔物に堕ちちゃったから、張ってた結界が消えてみんな入ってくるね」

「そしたら、もっといっぱい、いろんなおちんちんを楽しもう？♡ ふふふ♡」

「キミはどんな声で鳴いてくれるかなあ♡ 想像しただけで……んん♡ ワクワクしちゃうね♡」

「いっぱい中に出されてえ♡ 司祭君もいっぱい精液出しちゃうの♡」

「今よりもすごい量、出ちゃうかもね♡ ふふふ♡」

「みんなにキミの祝福を射精してあげて……お返しに射精してもらって、体にいっぱいぶっかけられちゃおう♡」

「ぐっちょぐちょの快楽を楽しもうね……司祭君……♡」

「これからも、気持ちよくなることだけ考えて生きていこうね♡」

「あたしのオナホ穴……♡」

「ああ……これからのこと、楽しみだね♡」

「ずっと、犯してあげるからね……ちゅっ♡」